

むかしがあった。

あるところに、さるとかえるがあった。

お正月も近いある日のこと、さるは、おもちを食べたくてしかたがなくなりました。そこで、かえるの所に行っていました。

「かえるどん、かえるどん。おまえ、おもち、食べたくないか」

「うん。食べたい」

「そしたら、食べに行こう」

「うん。行こう。でも、おもち、どこにあるんだ」

「ほら、ほら、あの音聞いてごらんよ。ぺったん、ぺったん、人間がおもちついてるだろ」

「うん。ほんとうだ。あそこへ食べに行こう。でも、どうやるんだ」

「そうだなあ。おまえ、あの家の裏で『ほおぎやあ、ほおぎやあ』って、赤ん坊の泣き声出してくれ。みんなびつくりして出てくるから、そのすきに、おれがおもちをぬすんでくる」

「うん。そんなら行こう」

にひきは、村に下りて行って、おもちつきをしている家に来ました。そして、かえるが、その家の裏で、「ほおぎやあ、ほおぎやあ」と、赤ん坊の泣きまねをしました。家の人たちは、

「あれ、赤ん坊の泣き声がするぞ。捨て子じゃないか」といって、出て来ました。みんな、どこだ、どこだと探しましたが、赤ん坊はどこにもいません。

さるは、そのあいだに、そと表から家の中に入って、臼のままおもちを背負って逃げ出しました。かえるも、さつさと逃げました。

かえるが、山のふもとまで来てみると、さるが先に着いていて、一生懸命おもちを食べていました。かえるは、

「さるどん、さるどん。おれにも、おもちおくれ」といいました。すると、さるは、

「うんにゃ。おれが背負ってきたんだから、やらない」といいました。

「でも、おれが泣きまねしたから、とって来られたんだぞ」

「うんにゃ。おれが背負ってきたんだから、おれのもんだ」

さるは、そういって、臼を背負って逃げようと思いました。けれども、山坂が急なので、なかなか登れません。そこで、臼を横にして、ごろごろ、ごろごろ押しながら、山を登っていきました。

山を登っていく途中で、臼から、おもちが落ちてしまいました。さるはいっこうに気がつきません。かえるは、すぐに見つけて、拾って食べはじめました。

さるは、山のてっぺんまで来て、やっと、臼の中におもちが入っていないのに気がつきました。山の下を見ると、かえるが、一生懸命おもちを食べていました。さるは、飛んで下りて来て、

「かえるどん、かえるどん。おれにも、おもちおくれ」といいました。

「うんにゃ。おれが拾ってきたんだから、やらない」

「土のついたところでもいいから、おくれ」

かえるは、土のついているところを引きちぎって、

「ほら、食べ」といって、さるの顔に投げつけました。おもちはつきたてだったから、熱いのなんの。さるは、

「あつつつ」と、顔をおさえて飛び上がりました。それで、今でも、さるの顔は赤いのです。

さるは怒って、山の上から臼をつき落としました。臼は、ごろごろと転がって行って、かえるの上に乗っかりました。

それで、今でも、かえるの目玉は飛び出していて、体はべしゃんこなのだそうです。

おしまい

村上郁再話

資料『津軽むがしこ集』川合勇太郎